

〈原著論文〉

# 明治中期京都における図案会の活動

## Activities of Design Associations in Kyoto in the Mid-Meiji Era

平 光 睦 子  
(Chikako HIRAMITSU)

**Abstract** : In the mid Meiji era, design associations originated successively in Kyoto. In this paper, I shall highlight their activities, and examine what roles they played in the cradle of the design. I focus on four associations from the 1880s to the 1890s in Kyoto : Kyoto Bizyutsu Kyokai, Shin Zuankai, Yuzen Zuankai, and Kyoto Gonikai Zuanbu. Their common activities included conducting design competitions with prizes and publishing bulletins or design books. The activities created accessible meeting places for design seekers and designers. In addition, they promoted communication between generations of designers or artists, and laid the foundation from which the ‘designer’, a principal occupation of design, arose.

**Key words** : Design, Meiji era, Kyoto, Design association

### 1. はじめに

明治中期、京都では図案会が相次いで結成される。本稿ではこの時期を京都における図案の揺籃期ととらえ、図案会の活動をできるかぎり明らかにし、それらが果たした役割を考察する。

近代京都の図案会に関する先行研究として、藤本恵子による「近代京都の染織産業と図案研究会－京都市立美術工芸学校図案科卒業生による図案研究会『美工会』の活動記録から－」<sup>1)</sup>がある。1909(明治42)年に発足した美工会は、京都市立美術工芸学校の教員および同校図案科の卒業生、実業家らによって構成された図案研究会であり、この会の発足は、1988(明治21)年に京都における初めての図案の専門教育機関として設置された同校応用図案科の図案教育が浸透し、その成果が産業界で試される段階をむかえつつあったことを示している。藤本は美工会が発足した明治40年頃から大正末期にかけての期間を京都における図案の黄金期とし、図案研究団

体、学校教育、産業がそれぞれにあゆみより協調することによって隆盛をむかえたと述べている<sup>2)</sup>。さらに同時期の動向として、京都高等工芸学校系と京都市立美術学校系の二派をはじめとする図案会の活動をあげ、それらを含めた図案会の系譜を図表「京都の図案研究会のながれ」として提示した<sup>3)</sup>。

藤本による図表は、明治中期から大正期にかけて京都に存在した主要な図案会を発足順に並べ時間的な流れをおおまかに示したという点で意義深いものであったが、それぞれの活動内容や性質の違いにまで踏み込むことはなかった。ここでは、この図表をひとつの指標とし、近年の研究成果を加えながら、各図案会の目的や活動を探り、活動に参加した画家や図案家たちを手がかりに図案会のはたした役割について考えたい。

図表「京都の図案研究会のながれ」に掲載された図案会のなかで明治中期に活動したのは、友禅図案会と京都五二会図案部である。本稿ではさらに同時期に発足したもうひとつの図案会、新図案会をとりあげる。さらに、純然たる図案会とはいえないが、他の図案会と共通する目的をもって活動した団体として京都美術協会にも注目

表1 明治中期の京都の図案会のながれ

		京都美術協会	
		新図案会	
明治 25 年	友禅図案会		京都五二会図案部
		?	
			?
明治 30 年			

藤本恵子作成の図表「京都の図案研究会のながれ」のなかで本稿が対象とする明治中期の部分を取り、それに執筆者があらたに加えた。下線は執筆者が加えた団体。

する。1890（明治23）年に発足した京都美術協会から1892（明治27）年に発足した京都五二会図案部まで、活動期間が短いものもあれば長いものもあるが、これら4つの団体をとりあげることで明治中期の図案会の動向を俯瞰し、当時の図案を巡る状況の一端を照らし出すことができる【表1】。

京都において、図案の重要性が認識される契機となった出来事は、1891（明治24）年5月に実施された高島屋の縮緬帛紗図案懸賞募集だったといわれる<sup>4)</sup>。懸賞募集の審査にあたったのは岸光景（1839-1922）、福地天香、内海吉堂（1850-1925）、今尾景年（1845-1924）で、岸竹堂（1826-1897）、幸野樗嶺（1844-1895）、竹内栖鳳（1864-1942）、渡邊省定（1851-1918）、川端玉章（1842-1913）、海外天年（1860-没年不詳）、大庭學仙（生年不詳-1899）、都路華香（1871-1931）、菊池芳文（1862-1918）、鈴木萬年（1828-1891）ら、今では名の知れた画家たちがごぞって応募したが、一等を受賞したのは田中一華（1864-1924）、二等は河辺華拳（1844-1928）と山本輝山、池田鴨江だった<sup>5)</sup>。このなかで明らかに図案の専門職といえるのは、審査員をつとめた岸光景だけである。光景は、これに先立つ1885（明治18）年の第三回内国勸業博覧会において考案家としてただ一人受賞した人物である。

明治初期には、画家が生活のために下絵を描くことは珍しくなかった。その後、明治20年代になっても、高島屋や川島織物をはじめ、業者や商店が画家を図案や下絵の制作に登用する事例は数多くみられ<sup>6)</sup>、縮緬帛紗の

図案懸賞募集への応募者もまた多くが画業を本業とする画家であった。業者が画家以外に専属の図案家をかかえることもあったが、それらの図案家は業者の手となってその考えを具現化する職人的存在でしかなく<sup>7)</sup>、画家が描いた下絵はそうした図案家や職人たちによって加筆、修正され、使用された。

明治中期に発足した図案会もまた、多くがこのような図案家の立場を反映していたと考えられる。しかし明治30年代後半になると、図案を専門とする図案家が現れはじめ、業者や関係諸機関とは一線を引くかたちで図案会や図案研究団体を立ち上げる。図案家が自立的な立場を確立するということは、同時に豊かな創造性と高い職能が彼らに要求されることでもあったが、それらは明治末期以降の図案の黄金期を向かえるにあたってもっとも重要な要素だったと考えられる<sup>8)</sup>。本稿では、画家の副業としての図案家ではなく、また業者の意を汲む技術職としての図案家でもない、自立した専門職としての図案家が出現するまでのひとつの段階という視点から、明治中期の図案会が果たした役割について考察する。

## 2. 京都美術協会

京都美術協会は、1890（明治23）年に京都ではじめての本格的な美術家団体として発足した。設立時の会員はおよそ190名<sup>9)</sup>、会頭に京都府知事の北垣国道（1836-1916）、名誉会員に松方正義（1835-1924）、土方久元（1833-1918）、佐野常民（1822-1902）、品川弥二郎（1843-1900）、九鬼隆一（1852-1931）と国の産業政策にも携わる政治家たちが顔を揃えたことから、図案会としては幾分異色の団体といってもよいであろう。とはいえ、第三回内国勸業博覧会への京都府の出品品に関する話合いのなかから生まれた団体で、幹事や評議員、常設委員には、京都の有力業者や画家、美術工芸家らが名を連ねていた。設立の趣旨に「美術工芸家と美術奨励家の結合を作り衆智を湊め群意を合せて實業家と批評家と合協力して固陋偏僻の趣向を去り優美高尚の意匠を養ふのみ即ちいわゆる美術協会の起すに在り<sup>10)</sup>」とあるように、同会の目的は関係者が団結して京都の美術工芸を改革し、発展させることであった。

京都美術協会の当初のおもな活動は、機関誌『京都美術雑誌<sup>11)</sup>』【図1】の発行と展覧会や陳列会の開催であった。機関誌には美術工芸についての論説や国内外の状況を伝える記事のほか、社寺旧家の宝物や和漢古今の優れた美術品などの図版が点数はわずかだが毎号のように掲載され、その内容からは比較の実制作に重きを置いて



図1 『京都美術雑誌』第壹号(1890年10月), 第三号(1892年2月), 京都美術協會蔵版, 田中治兵衛。

いる印象を受ける。

しかしながら、ここで京都美術協会をとりあげる理由は実制作重視の姿勢だけでなく、同会のもうひとつの活動、陳列会や展覧会と同時に行われていた図案の懸賞募集にある。

京都美術協会では発足間もなく陳列会がはじまるが、その変化にともなって図案の懸賞募集の形式も変わっていく。1892(明治25)年から陳列会および展覧会が定期的に開かれ、1895(明治28)年には第四回内国勸業博覧会の京都での開催を機に陳列会と展覧会が新古美術展覧会へと統合される。さらに、1901(明治34)年に協会内に京都美術奨励会が組織されると、第八回新古美術展覧会から他の工芸分野でも受賞作品に褒賞金がつくようになったことで、懸賞募集という形はとくに図案に限ったものではなくなっていく。

以下、京都美術協会の図案懸賞募集がどのようなものだったのか、おもに、陳列会の期間と新古美術展覧会の初期について詳しく見ていきたい。

#### (1) 陳列会の図案懸賞募集 明治25年から28年頃まで

陳列会は、全体を第一部「書、画、漆器、彫刻、木具指物」、第二部「金属器、鬼國窯、陶磁器」、第三部「織物、染物、刺縫、糸組物」の三部門にわけ、それぞれ順番に一回ずつ、全体で年三回のペースで開かれた。陳列会の展示は参考品の部と新作の部から構成されたが、併行して陳列会と同じ部門の図案の懸賞募集が実施された。

第一回の図案懸賞募集は1892(明治25)年1月の第一部の陳列会で行われた。勅題は菊花。協会内外から340点の応募があり、応募図案は一般公開後に審査を受けた。一等は杉田安之助、西田玉華、田中幽峯、駒沢柳

外の4名が受賞し、二等から四等までを52名が受賞した。同年9月に開催された第二回の図案懸賞募集には80余点の応募作品から、一等から十二等までが選出され、これ以降毎回概ね十二等まで順位が決められて、上位入賞作品は機関誌に掲載されることもあった。

審査にあたったのはおもに評議員などの役員たち<sup>12)</sup>だった。初期の記録には審査員については20余名とあるだけで詳細は不明だが、明治25年頃からは毎回事前に審査員が決められるようになった。しかし、1892(明治25)年10月の懸賞募集の審査員に選ばれた27名の顔ぶれを見るとそのほとんどは評議員や常設委員で、その後も評議員など役員のなかから7名から10数名が選ばれた<sup>13)</sup>。

また、はじめは比較的簡潔だった勅題は次第に複雑になっていく。例えば、1894(明治27)年の第二部陳列会の場合、懸賞図案の勅題に「陶磁器花瓶適用、模様は荒磯」や「七宝飾壺適用、模様は桐鳳」とあり、さらに同年の第三部陳列会の場合には「刺繡帛紗『富貴長命図』」、「友禅模様『今様歌意春の弥生』」とあるように、極めて限定的な題が出されるが、それらは役員会で決めたのもであった。

受賞作品については、とくに機関誌に掲載された受賞作品以外に関しては情報に乏しいが、受賞者名の記録からだけでもいくつかのことに気づかされる。そのひとつは、毎回必ず京都美術学校の生徒が入賞していることである。なかでも1892(明治25)年10月の懸賞募集では、受賞作品10点のうち半数を美術学校の生徒の作品が占めている。また、受賞者のなかには河合鹿次郎や宮川常次郎、山崎茂信のように複数回受賞した生徒もいた。

もうひとつは、呉服商、西村治兵衛(1861-1910)や陶芸家、伊東陶山(1846-1920)の元から個人名での出品があったことである。しかも彼らのなかには、著名な陶芸家の元に身をおきながら陶磁器部門以外で受賞するものや呉服商にいながらも第一部で受賞するものもあり、彼らを画家と呼ぶべきか図案家とよぶべきかは定かでないが、業者や工房に所属していてもある程度は応募の自由が利く立場にあったことがうかがえる。

#### (2) 新古美術展覧会の図案懸賞募集 明治28年頃から35年頃まで

1895(明治28)年からはじまった新古美術展覧会は、いってみればそれまで三部にわかれていた陳列会を一度に行うといもので、年一回のペースで4月から5月にか

けて開催された。展示は参考品と新製品からなり、新製品は、書画部、漆器蒔絵部、陶磁器部、金属部、織物刺繍染物部、各種工芸部で構成され、図案の懸賞募集はいわば付随事業であった。図案募集に際して、彫刻、漆器、木具指物、金属器、七宝、陶磁器、織物、刺繍、染物、絲組物の部門別に題が与えられ、審査は全部門をひとまとめにして行われた。

陳列会が新古美術展覧会になって、図案懸賞募集には開催形式や回数以外にもいくつかの変化がみられる。

そのひとつは審査の厳格化である。臨時陳列会として実施された初回は、総応募作品数が176点と少なく、一等は該当なし、二等と三等で11点の受賞という振るわない結果に終わったが、一等が選出されない状況はその後も続き、一等から三等までの該当作品がないことさえあった。この期間内の一等受賞者は1900(明治33)年の創立十周年記念展での古谷紅麟(1875-1910)ただ一人で、それまでの陳列会ではほぼ毎回一等から十二等までが選出されていたことと比べると、審査が厳格化したといってもよいであろう。

初回の図案懸賞募集で一等が該当なしとなった理由について、審査委員長の今泉雄作(1850-1931)は次のように述べている。「是意匠の上に於て頗る進歩を視るものの如し然れども圖案の定則を備へ其圖を見て直に製作さる可なるものは一二に過ぎず<sup>14)</sup>」。図案が実際の製作に適っていないという指摘だが、前年の陳列会における図案評にも次のような同様の指摘がみられる。「抑も蒔絵には蒔絵の特色ありて圖様も自ら之に相應したるものならざる可からず(中略)材質の許さざるありて用い難き圖のみ多し能く意匠を此に用ひて作り得可くして而も其圖の妙ならんことを勉む可し<sup>15)</sup>」。対象に相応しくない図案は、素材や技法の特色を十分に理解していないことに原因があるというのである。陳列会から新古美術展覧会へと切り替わる時期のこのような状況は、応募作品のレベルが下がったというよりも、すぐに製作にとりかかれるような完成度の高さが図案に要求されるようになったと考えるべきかもしれない。

そして、もうひとつの変化は審査員にある。陳列会では審査員はおもに評議員や常設委員ら役員がつとめたが、その多くは有力業者であった。新古美術展覧会では、金子錦二(1851-1909)、丹羽圭介(1856-1941)、神坂雪佳(1866-1942)、谷口香嶺(1864-1915)らが審査員をつとめた。金子は日出新聞の記者だが、美術に明るく京都美術協会以外の美術や工芸関係の団体でも審査員や役員をつとめた人物、丹羽は美術工芸関係の京都府の

事業や博覧会に携わった人物である。画家でありながら多くの工芸図案を手がけた雪佳と香嶺も含め、業者や商店とは違って、図案に直接的な利害関係がない顔ぶれである。応募図案に実製作への適応を要求しながらも、その一方で製作や販売に直接的に関係する業者らが審査からはなれることには矛盾があるようにみえるが、むしろ、図案に実践性が必要になったからこそ一定の客観性や公平性を担保するための対処だったと考えるべきであろう。

つぎに出品者や受賞者についても検討を加えたいところだが、残念ながら彼らについて詳しいことはほとんどわかっていない。受賞者のなかでは、古谷紅麟や上野清江(1871-1943)の名前に目がとまる。紅麟は、鈴木萬年に日本画を、神坂雪佳に図案を学んだ後、新古美術展覧会の懸賞募集における度重なる受賞を皮切りに図案家として活躍し始める<sup>16)</sup>。清江も懸賞募集で頻繁に受賞した時期と澤渡商店から独立した時期が重なることを踏まえれば、懸賞募集での受賞がその後の図案家としての活躍<sup>17)</sup>の足がかりになったとみることもできる。彼ら以外の受賞者の名前のなかには、神坂松濤(1882-1954)、津田青楓(1880-1978)、木村春甫、古谷雪山ら画家や図案家として知られる人物も発見できるが、彼ら以外の多くの受賞者については詳しいことは不明である。

### 3. 新図案会

新図案会からは、図案帖『西陣織物新図案』【図2】が刊行された。編集、発行は西陣の織物業者、中安信太郎(1859-1932)、発行所は京都書林である。1891(明治24)年11月発行の巻の壹から1894(明治27)年3月発



図2 『西陣織物新図案』巻の拾三(1892年1月)、新図案会、中安信三郎。

明治中期京都における図案会の活動

行の巻の甘まで続いた同誌以外、新図案会に関する資料は発見していないが、その活動は巻の拾三以降に掲載された以下の「新図案会規則」から推し量ることができる。

第一条 本会は図案の改良進歩を図るを以て目的とす

第二条 本会の目的を達する為の左の事を行う

- 一 毎月一回彩色新図案帖を発行し賞代価にて会員に配布す
- 一 懸賞新図案を募集し会員の展覧に供す
- 一 各地会員の協力を以て新図案常置展覧室を設くることを得
- 一 美術上に付必要あるとき臨時談話會を開く事あるべし

第三条 本會員を別て名誉會員特別會員通常の三種とす

第四条 本會の趣旨を翼賛し特に真拡張に勞力せらるる人を以て特別會員とす名誉會員は特別會員の推薦に任するものとす

第五条 本会は審査員若干名を会員中へ囑託し図案の審査を請ふものとす

(後略)<sup>18)</sup>

図案帖の発行、図案懸賞募集の実施、常設展示の設置、談話会の開催と、熱心な活動ぶりがうかがえる。図案帖は、1893(明治26)年4月の巻の拾五から同年10月の巻の拾六の間が半年間空いた以外は、ほぼ毎月一冊のペースで発行され、木版多色刷りで、一卷につき10点前後の図案が収録されている。図案帖に載った懸賞募集上位入賞作品からは、1892(明治25)年6月発行の巻の七に受賞作が掲載された第一回懸賞募集から翌年2月発行の巻の拾三に掲載された第五回まで、少なくとも5回は懸賞募集が実施されたことがわかる。

巻の式には「圖案會第一回會員申込姓名表」として会員130名の名前が掲載されており、そのなかには、稲畑勝太郎(1862-1949)といった技術職や、川島甚兵衛(二代1853-1910)、西村總左衛(1855-1935)、小林綾造(生没年不詳)といった有力業者の名前がみられる。

掲載図案が対象とする分野は、図案帖の名称が『西陣織物新図案』であるにも関わらず、織物だけではなく。毎巻、巻頭の人物画がからはじまり、花鳥模様や有職模様、シンプルな紋もあれば、織模様、裾模様、更紗模様などもあり、点数は多くはないが陶器の図案もある。

掲載された図案には、それぞれ標題と制作者名が記されている。全20巻に掲載された図案の制作者別点数は表に示したとおりである。【表2】神坂雪佳、田中月耕(生没年不詳)、一見連城(生没年不詳)、田中一華など、明治中期から多くの図案を手がけていた10名ほどの画家が大半を占めており、図案帖が特定の画家の発表の場であったことがわかる。なかでも雪佳はもっとも多く登場し、巻の壹を除いてすべての巻に作品が掲載されている。

4. 友禪図案会

友禪図案会は1892(明治25)年3月に設立された。設立時の「友禪図案会申合規則」には同会の目的に「第一条 本會を友禪圖案會と稱し會員は益々友誼を保持し、交情を親密にし併せて同業者の進歩を図るを以て目的とす<sup>19)</sup>。」と記されていることから、会員相互の親交を温め友禪図案の向上をはかることが主要な目的であったと考えられる。また、友禪図案会のおもな活動は図案の懸賞募集の開催であったが、第一回の募集主意書には「今回廣く圖案を募集し同業者の参考に供し増々技力を發展せしめんと欲す<sup>20)</sup>」ともあり、懸賞募集の場で互いに競い合うことを親交と発展の手段と考えていたことが

表2 『西陣織物新圖案』全20巻における制作者別図案点数

制作者	神坂雪佳	田中月耕	一見連城	田畑靄堂	田中一華	海外天年	梅村景山	長谷川玉純	藤井玉沙	國井應陽 上村松園
点数	29	23	20	15	14	13	10	10	8	各5
制作者	田畑雀堂	中井梅園 内海玉淵	小林梅仙 巖島虹后	鈴木萬年 竹内栖鳳 他12名	田中幽峯	〈図案懸賞受賞者〉 藤島秀太郎 河本弧亭 竹殿五山 岩崎嘯雲 國友稻仙			19名 (氏名略)	〈総数〉
点数	4	3	2	各1		各2			各1	205

『西陣織物新圖案』より執筆者が作成

わかる。懸賞募集の方法は、年4回、勅題を設定して図案を募集し、応募図案を展覧会で一般公開した後、審査するというものだった。設立時の会員は特別会員、賛助会員、正会員から構成され、正会員は「同業者にしてもっとも熱心なる者に限り、圖案銜五枚以上十枚以下出品するもの(後略)<sup>21)</sup>」とされた。

このような設立当初に関する記述からは、友禪図案会が図案家主体の組織だったと読みとることもできるが、主体はあくまでも「同業者」であり友禪関係業者であった。設立翌年の申合せには懸賞募集の審査員の構成は「賛成会員2名、模様専門家1名、正会員2名<sup>22)</sup>」とあり、業者4名にたいして「模様専門家」すなわち図案の専門職は1名というバランスに友禪図案会の性質があらわれている。1904(明治37)年には規則の改定にともない第一條が「本會は友禪工業専門家中の篤志者を以て組織す。」と改められ、友禪の同業者組織であることが明示される。

友禪図案会の懸賞募集は1890(明治25)年から1893(明治28)年までは年3、4回、その後1900(明治33)年までは年2、3回、以降は年1回実施され、開催回数は1911(明治44)年までに37回を数えた。応募状況や審査結果が新聞紙上でしばしばとりあげられるほど、人々の注目を集めたという。第一回の一等受賞者は画家、都路華香であった。

ところで、近年、一般社団法人京染会に保管されていた一群の明治期の図案が友禪図案会の懸賞募集への応募図案であることが明らかになった。これまで同会については『近代友禪史』【図3】にある程度まとまった記述があるものの、それ以外にはほとんど記録が残っておらず詳細は明らかにされてこなかった。本稿も、ここまでもに『近代友禪史』に基づいてすすめてきたが、新たに発見された応募図案をもとに、現在、加茂瑞穂を中心

にした研究チームによって詳細が調査されつつある<sup>23)</sup>。

その研究成果によると、友禪図案会でも当初は懸賞募集の応募者の中心は画家が占めていたが、第三回の受賞者には友禪職人もあり、明治30年代には美術学校の生徒も多数受賞していることから、次第に応募資格を広げていったと考えられる。また、下村玉廣、山本雪桂、小林玉年ら、この後多くの図案帖を発表していく画家や図案家らが懸賞募集で一等を受賞していたことも明らかにされた。友禪図案会については、今後のさらなる研究成果を待ちたい。

## 5. 京都五二会図案部

五二会とは、1894(明治27)年に結成された五品と二種の産業の振興をはかることを目的とした全国規模の団体である。五品とは織物、陶磁器、漆器、金属器、製紙及び紙製品、二種とは雑貨と敷物類のことで、五二会の活動は、各産業の現状調査、大会や品評会、懇談会の開催、情報誌や新聞の発刊、さらには「五二会」を冠した会社の設立等多岐におよぶ。五二会の結成を推進した前田正名(1850-1921)は明治10年代から地方産業振興運動に身を投じ、『興業意見』や「農工商調査」<sup>24)</sup>をととして自身の政策思想の普及につとめた。運動の主旨を少々乱暴に要約するならば、人々の生活や各地方の産業を顧みず移植大工業の保護育成を推進する政策にたいして、民力を形成し地方産業の実状に応じた段階的發展を優先させるといったものであった<sup>25)</sup>。主張の要旨は地方の在来産業の保護育成には違いないが、産業の近代化にたいして単純に反動、反発するのではなく、急速な大工業化には異論を唱えながらもその先に機械工業化を見据えていたところにこの運動の特徴がある。

機械工業化を見据える五二会の視点は、活動のなかにも散見することができる。例えば、1896(明治29)年に開催された五二会全国品評会の審査に関する記述では、「今回の審査方は専ら工業品に適用す<sup>26)</sup>」るとし、工業品の具体的な審査基準に、日常使用に適すること、一般需要に適うこと、価格が低廉なこと、同一製品を量産することなどを挙げている。

五二会は前田の展開する産業振興運動のなかから生まれた団体のなかのひとつで、伝統産業の地、京都に本部を置き、1894(明治27)年4月には京都で第一回全国大会が開催された。この大会は、参加35府県、出品人数3250人、出品点数およそ40000点、来館人数20余万人という壮大な規模での開催となり、運動の盛り上がりをも示すことになった。しかし1897(明治30)年に

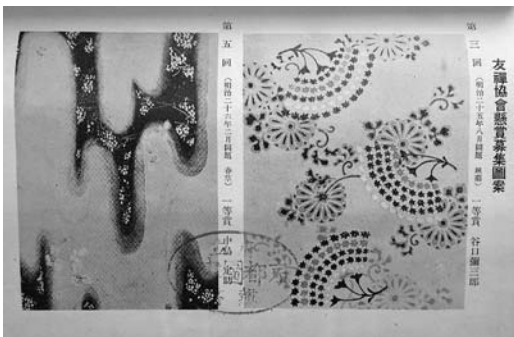


図3 村上文芽『近代友禪史』(1927年)、芸艸堂。

## 明治中期京都における図案会の活動

前田が運動の一線から退くことを表明すると五二会は転換期をむかえ、全国規模の結束は失われた個々に活動を続けた団体も明治末期にはそれぞれに終焉をむかえていった。

京都では五二会の結成と同時に京都五二会が発足した。発起人には西村治兵衛（1861-1910）、今西半兵衛、紹美栄助（1839-1900）、西村彦兵衛（八代 1886-1965）ら、五品二種を営む有力業者や工芸家、貿易商が名を連ねた<sup>27)</sup>。

そして、1896（明治29）年前後、京都五二会に図案部が設置される。図案部長は丹羽圭介がつとめた。当時、各府県の五二会のなかで図案部があるのは京都五二会だけであった。五二会図案部規定には、活動内容が次のように記されている。

第四條 圖案部に於ては課題を定め技藝員其他賛成有志者等より本會各部の製作品に應用せらるべき新圖案を徴し且懸賞圖案會を開き汎く一般圖案より之を募り其優等なるものを抜萃し五二會新圖案帖に掲載發行するものとす<sup>28)</sup>

図案部の活動は、新図案の製作、懸賞募集の開催、応募図案の展覧会、図案帖の発行、というこの時期の図案

会としては標準的のものであった。

『美術協会雑誌』の五二会図案部の設置を知らせる記事には、「彼の団体は普通工業品を製作販賣するの營業たれとも、時期を追ひて流行に後れざらむとするの勸奨篤きより、終に圖案の必用を認めしものと推測せらる<sup>29)</sup>」という冷やかな見解が見られることから、やはり幾分後発の感は拭えなかったようである。また、「新圖案發行趣旨」には「方今世情の風潮服飾器具より調度器物に至り形式文彩に於ける新陳代謝期月を啗るに工業者の心匠豈他事なり（後略）<sup>30)</sup>」ともあり、製品の模様等における流行の移り変わりが顕著になってきたことが図案部の設置を後押ししたと考えられる。

規定に記された活動がどの程度実施されたかは定かでないが、図案帖『五二會新圖案』【図4】は、1897（明治30）年4月発行の巻壹から同年10月発行の巻三までの3冊を確認することができる。図案帖は木版多色刷りで、編集は五二会京都図案部幹事的神坂雪佳<sup>31)</sup>、発行者は同、田中治兵衛である。掲載された図案は染織図案が中心で、なかには陶器などの図案もみられるが、特に量産の工業製品向けの図案と見なすことはできない。全3巻に掲載された図案の制作者と点数は表のとおりである【表3】。岸竹堂の門弟、藤島清漣や、金工家、安達真速、四条派の画家、三宅呉暁（1864-1919）らの名前に目がとまるが、制作者全員の顔ぶれからは『西陣織物新図案』と似通った印象を受ける。

## 6. おわりに

以上のとおり、明治中期に発足した4つの図案会、図案研究団体の活動を発足順に追ってきた。

京都美術協会は、4つの団体のなかでもっとも早く発足した。その規模の大きさからは、他の団体への影響力を持っていたと推察される。しかも活動期間が長く、活動の記録が比較的整然と機関誌に記されているため、本稿でもっとも多く字数を割くことになった。活動内容は、展覧会や陳列会の開催、機関誌の発行、図案の懸賞募集の開催など、他の団体とほぼ共通している。これらの活動は、懸賞募集の応募作品を展覧会で公開し結

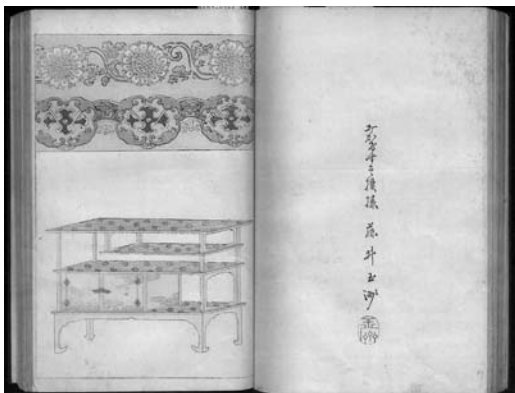


図4 『五二會新圖案』（1897年）、神阪吉隆編、五二會京都図案部。

表3 『五二會新圖案』全3巻における制作者別図案点数

制作者	神坂雪佳	田中月耕	藤島清漣	安達真速	藤井玉洲 海外天年	長谷川玉純 一見連城	森雄山 上野清江	〈図案懸賞受賞者〉 麻生庸二 岡田紫郊 三宅呉暁	〈総数〉
点数	2	2	2	2	各1		各1	25	

『五二會新圖案』より執筆者が作成

果や受賞作品を機関誌で広く知らしめる、という一連の活動として定型化していったと考えられる。それゆえ、京都美術協会における陳列会から新古美術展覧会への改変は、ひとつの完成形の成立と見なすことができるであろう。改変の数年後には会員数が最大に膨らみ、協会は最盛期をむかえ、間もなくして京都における図案の黄金期をむかえる兆しが見える。1903(明治35)年に10数名の有志が立ち上げた、後に京都図案会と名乗る団体はまさしく図案家主体の団体であり、その活動内容も明治中期の図案会をさらに発展させた積極的なものであった。

ここで、本稿でとりあげた団体に共通する活動、図案の懸賞募集の機能をあらためて整理してみると、懸賞募集では基本的に主催する図案会が勅題や審査を通して求める図案の条件や基準を示し、応募者は受賞すれば自身の図案家としての能力を保証される。また、応募作品が一般に公開され審査結果が広報されることによって、主催する図案会は人々の反応から製品の需要を予測し、図案家は展示作品を目のあたりにすることで他の図案に学び広い視野で自身の図案を見直すことができる。すなわち、懸賞募集に関わる一連の活動は図案を求める業者と図案を制作する図案家や画家との開かれた出会いの場として機能し、さらには需要者である多くの人々の図案や製品にたいする関心や理解を喚起する場でもあった。

図案の懸賞募集のこのような機能は、懸賞募集がはじまった頃からというよりも、各団体が回数を重ねるなかで成立していったと考えられる。初めての図案の懸賞募集、高島屋の帛紗図案の懸賞募集が正しくそうであったように、明治20年代半ば頃までは産業政策そのものが美術工芸品の輸出産業化を模索しており、懸賞募集にもそうした傾向が顕著であった。それが次第に国内市場向けへと転じてより多彩でより新しい図案が求められるようになる時期と、懸賞募集が盛況を極める時期とが重なってくる。

では図案の制作者にはどのような変化があったのか、画家や図案家からこのことを考えてみたい。再び高島屋の帛紗図案の懸賞募集に立ち戻ると、先述したとおり、応募者のなかには画家を本業とするものもあり、しかもそのなかには美術学校で教鞭をとるものも少なくなかった。美術学校は設立時から地元の工芸産業との結びつきが強く、業者への図案の提供は教育活動の一環でもあった<sup>32)</sup>。いくつかの懸賞募集で美術学校の生徒が受賞していることから、懸賞募集にも教育活動の延長という側面があったとも考えられるが、とはいえ、生徒にとって

は学校の外へと踏み出す一歩でもあったであろう。また、古谷紅鱗や上野清江の例にみられるように、美術学校の生徒以外にも懸賞募集での受賞を足がかりに台頭した図案家もあったことを顧みれば、懸賞募集は開かれた教育の場として、若い図案家の登竜門としても機能したと考えられる。

新図案会や京都五二会図案部が発行した図案帖を見ると、この媒体の機能も見逃せない。二つの『新図案』では、特定の画家たちが大いに存在感を放った。彼らの作品は図案帖に掲載されることで、展覧会とは異なるかたちで図案の見本を示し、影響力をより長期間維持することができた。とくに新図案会が発行した図案帖『西陣織物新図案』は、明治30年代に盛んに出版されはじめる図案帖の先駆けでもあり、図案帖のメディアとしての可能性を示した事例ともいえるであろう<sup>33)</sup>。

最後に、明治中期の図案会における神坂雪佳の動向についても触れておきたい。本稿でとりあげた4つの図案会のなかで、雪佳は、京都美術協会、新図案会、京都五二会図案部の活動に参加している。京都美術協会では、第一回新古美術品展覧会の懸賞図案に応募して今集歌意香炉陶器図案を出品して二等褒賞を受賞し、その後、新古美術展覧会で図案係をつとめ、第六回では審査員にもなっている。さらには1898(明治31)年9月からは機関誌の編集者になり、後に評議員にも就任し、協会を支える存在になっていく。また、新図案会では図案帖に数多くの作品を提供し、京都五二会図案部では幹事として機関誌の編集を担った。すでにこれらの活動だけでも京都図案界における中心的人物の一人と見なすことができるであろう。しかも雪佳は、1895(明治28)年には京都市美術工芸学校の教諭に、その翌年には京都市立工芸図案調製所の主任になり、さらにその後、自身が主導する図案研究団体、佳都美会を創立する等、いよいよ京都の図案界を主導する存在になっていく。雪佳は、明治中期の図案会での活動から何を心得、それが後の活躍にどのように結びついていったのだろうか、その検証は今後の課題としたい。

#### 注

- 1) 藤本恵子「近代京都の染織産業と図案研究会 - 京都市立美術工芸学校図案科卒業生による図案研究会『美工会』の活動記録から -」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第8集、京都文化博物館、1995年。
- 2) 藤本、前掲、p132。



明治中期京都における図案会の活動

- 3) 藤本, 前掲, p 130. 藤本氏は「京都の図案研究会のながれ」を「京都の工芸の系譜」(『京都府百年の歴史 8』京都府立総合資料館編, 1970年)および『近代友禅史』(村上文芽著, 芸艸堂, 1927年)に参照して作成された。
- 4) 『京都伝統工芸の近代』(並木誠士, 清水愛子, 青木美保子, 山田由希代編, 思文閣出版, p 179.)では, この懸賞募集を図案展覧会の嚆矢とし, その後流行現象のように頻繁に開催された懸賞募集を図案の発展をはかる動きのはじまりと見なしている。
- 5) 村上文芽『近代友禅史』芸艸堂, 1927年, p 105, 106。
- 6) 高島屋では1882(明治15)年には岸竹堂と今尾景年を登用し, 1888(明治21)年に設置された画工室には, 田中一華や竹内栖鳳, 都路華香らが籍をおいた。
- 7) 比沼悟『近代図案ものがたり』京都書院, 1972年, p 92。
- 8) 明治30年代後半から図案家が主体となった図案会が結成される。そうした図案会では図案家という新しい専門職の自立とその役割について活発な議論が展開する。この件については拙稿「京都図案会の活動と理念—明治期京都の染織図案」(『服飾文化』, 服飾文化学会, Vol.12 No.1, 2012年, pp 71-80)に詳しい。
- 9) 会員数は明治33年には1142名にまで増加し, 最多を記録する。
- 10) 『京都美術雑誌』第壹號, 谷口香嶠編, 田中治兵衛発行, 1890年, p 2。
- 11) 明治23年10月から明治25年2月まで誌名は『京都美術雑誌』であったが, 改名して明治25年7月から『京都美術協会雑誌』に, さらに改名を重ねて明治38年9月からは『京都美術』になった。大正8年12月までに計205号が発行された。
- 12) 設立時の評議員や委員には, 飯田新七や川島甚兵衛, 児島定七ら地元業者と幸野樺嶺, 岸竹堂, 森川曾文ら画家がいた。
- 13) たとえば明治26年の第三部染織部門の審査員には, 佐々木清七, 山田泰蔵, 鳥居喜兵衛, 福田忠次郎, 飯田新七, 西村治兵衛, 林長次郎が選出されており, その多くが染織業者であることから, 審査には業者の意向が少なからず影響していたと推察される。
- 14) 『京都美術協会雑誌』42巻, 1895年, 京都美術協会事務所, p 53-54。
- 15) 『京都美術協会雑誌』33巻, 1895年, 京都美術協会事務所, p 49。
- 16) 古谷紅麟は, その後, 多くの展覧会に出品し多数の図案帖を手がける傍ら京都市立美術工芸学校や京都高等工芸学校で教鞭をとった。(『近代図案コレクション新美術海』解説・藤井健三, 芸艸堂, 2006年, p 87。)
- 17) 京加賀を確立した友禅の染織工芸家として知られる上野清江は, 図案帖の出版やセントルイス万国博覧会への図案の出品など図案家としても活躍した。
- 18) 『西陣織物新圖案』巻一三, 中安信三郎編, 新図案会, 1893年, p 1。
- 19) 村上, 前掲, p 115。
- 20) 村上, 前掲, p 115。
- 21) 村上, 前掲, p 115。
- 22) 村上, 前掲, p 129。
- 23) これまでに発表された, 友禅図案会に関する加茂瑞穂による研究に, 「財団法人京染会蔵友禅協会の図案について: 明治期における友禅図案」(『服飾文化学会誌』12(1), 2011年, p 59-69), 「友禅協会の図案にみるデザインの変化 第1回から第25回を中心として」(『アトリエサーチ 14』, 立命館大学, 2014年, p 19-30), 「明治大正期の図案募集 きものに関連して」他(『纏う図案 近代京都と染織図案 1』岡達也, 加茂瑞穂編, 京都工芸繊維大学美術工芸資料館, 2017年, p 2, 8, 9)がある。
- 24) 前田は, 大蔵省, 農商務省の書記官だった明治17年に国内産業の実態調査にもとづいた殖産興業のための報告書『興業意見』全30巻をまとめた。その後, 明治23年に農商務省工務局長として「農工商臨時調査」を開始し, その報告は300冊を超える「臨時調査顛末」としてまとめられた。
- 25) 祖田修「解題『五二会資料』」『明治中期産業運動資料 第21巻ノ2 五二会資料Ⅱ』日本経済評論社, 1979年, p 1。
- 26) 『五二會全國品評會事務報告』, 五二會京都本部, 1897年, p 337。
- 27) 京都五二会の活動は, 全国大会への参加のほか, 見本品陳列会や品評会の開催, 同業者の懇親会,

- 産業別の実態調査, 京都綿ネル会社の設立など, やはり多岐に及んだ。
- 28) 『京都美術協会雑誌』56巻, 1897年, 京都美術協会事務所, p 28。
- 29) 『京都美術協会雑誌』56巻, p 28。
- 30) 『五二會新圖案』1巻, 神坂吉隆編, 五二會京都圖案, 1897年, p 1。
- 31) ただし, 奥付には神坂吉隆とある。
- 32) 拙稿, 「京都の美術工芸学校における圖案教育の特性 岡倉天心『美術教育施設ニ付意見』との相違点」(『デザイン学研究』60(1), 2013年, p 69-76。)に詳しい。
- 33) 土田真紀氏は, 明治30年代に京都で盛んに出版された図案集のなかに, この頃から大正期にかけての工芸図案の世界における「図案の芸術化」を見いだしている。(土田真紀「明治三十年代京都の図案集と『図案の芸術化』」『明治・大正図案集の研究 近代にかざされた江戸のデザイン』樋田豊次郎, 横溝廣子編, 国書刊行会, 2004年。P 93-103。

(2017年11月17日受理)  
(2017年12月1日採択)